

⑤ 人が去ったそのあとに — 無居住化集落から見える人口減少時代の自然環境 —

生物・生態系環境研究センター 深澤 圭太

日本の人口は2010年頃から減少に転じており、2050年には全国の総人口が1億人を下回ると予想されています。そして、現在住民がいる地域のうち、3-5割の面積において住民が全くなくなる(無居住化する)ことが危惧されています。無居住化やそれに伴う土地の管理放棄が広がれば、自然環境にも大きな変化が起これと考えられます。



本講演では、広域・長期的な無居住化が自然環境に与える影響を明らかにするための研究についてご紹介します。私たちの研究グループでは、福島第一原発事故の避難指示に伴い無居住化した地域において哺乳類や鳥類、昆虫類等のモニタリングを実施しています。広域で無居住化したこの地域においては、イノシシ等の中大型哺乳類が周辺より高い密度で生息していました。捕獲作業をする人の減少や、農地跡の草地など餌場が増加したことが原因と思われます。周囲の人間の生活圏と接する場所では、農作物被害や交通事故などが起こらないように対策が必要と考えられます。鳥類や昆虫については、ウグイスや一部の小型ハナバチ類が多く確認された一方で、ツバメやクマバチのような身近な種が少ない傾向がありました。人が不在となることや、それに伴う環境変化は、種によってプラスにもマイナスにもなるようです。また、全国に存在している過去に無居住化した集落を対象として、長期間の無居住化が景観や生物相に及ぼした影響についても研究しています。生息環境が多様なチョウ類について調べてみたところ、人家周辺や農地に生息する身近なチョウ類や、近年減少が著しい草原性のチョウ類が無居住化の負の影響を受けることがわかりました。今後しばらくの間、人口減少が続くことは人口学的に見て避けられないため、その中で生物多様性の保全や人と野生動物の軋轢解消を効率化するための研究を進める必要があると考えています。



無居住化集落の学校跡。校庭であったと思われる場所には草が生い茂っている。